

ヴィクトリア朝絵画における「花売り娘」像の変遷

W・ログスデイル《セント・マーティン・イン・ザ・フィールズ》を手がかりに

小野寺 玲子(横浜美術大学)

ウィリアム・ログスデイルは4年間で5点のロンドン光景をロイヤル・アカデミーに出品したが、そのひとつ《セント・マーティン・イン・ザ・フィールズ》(1889年、テイト美術館)は、最前景の花売りの少女が印象的である。一見リアリズムのようだが、「花売り娘」は19世紀を通じてイギリスの絵画や小説に頻出する労働階級の類型である。これまで「お針子」や「堕ちた女」ほどには、ヴィクトリア朝美術の研究対象として取り上げられていないが、2002年にクリスティーナ・ユノーが「花売り娘」に注目し、ログスデイルの少女は都市のアウトカーストではなくインサイダーとして機能していると結論づけた。本発表では、ユノーの論点を援用しながら「花売り娘」の図像とその源泉について、より具体的に考察する。そしてその重層的・両義的な象徴性ゆえに「花売り娘」は都市景観の構成要素となり、さらにポスターや版画集などにおいてロンドンを代表するキャラクターへと変貌していったことを論証する。

「花売り娘」のイメージは、種々の呼び売り商人を描いた18世紀の版画に由来するといわれる。商品ごとに類型化されたこれらの画像は専ら全身像であるため、花束を差し出して微笑む半身像のタイプは、フローラ(花の擬人像)にも依拠していると思われる。美や無垢およびその儂さといった象徴性を担う点で、他の呼び売り商人より突出して絵画化の需要があったのであろう。一方メイヒューの『ロンドンの労働と貧民』(1861年)や第2回選挙法改正(1867年)などを機に貧困者層に対する社会の関心が高まると、全身像で貧しい身なりが強調された。都市環境を背景に、乳幼児を連れた母親や幼い少女として表されることも多く、お針子や娼婦と同様に急激な近代化の犠牲者を代表するようになる。都市の現実である貧者の姿は、「花売り娘」という定型によって美化され感傷性を纏ってこそ、ミドルクラスにとって受け入れ易かったのである。

ログスデイルやジョージ・クラウゼンら1880年代の画家たちは、伝統的な花の象徴性と旧社会の慣習とを受け継ぐこの貧者のタイプを街の光景の一部に使い、ミドルクラスの女性と並置して、富裕と貧困、都会と田園の対比を表現した。しかし当時すでに花は地方から列車で運ばれロンドンの市場で大量に取引される商品であり、ユノーが指摘するように「花売り娘」は大都市の貨幣経済の一部を成していたと考えられる。そのため犠牲者としての悲惨さは強調されなくなり、ログスデイルの「花売り娘」も、同時代のロンドンから切り離せない要素として、教会に次ぐ主役のように最前景中央に位置を占めるのである。世紀末には《ロンドンの典型的な人々》(ウィリアム・ニコルソン、1898年)と題する版画連作に表される13人に、警官やビーフィーター、新聞配達人らと並んで「花売り娘」も選ばれている。「花売り娘」は美しく古き無垢なる田園の記憶を留めたまま、近代都市ロンドンに不可欠なモチーフとなったのである。